

前へ

高野町立高野山中学校 三年 中谷 颯来

みなさんは、人にどのような人だと言われますか？「明るそう」「元気そう」初対面で私がよく言われる言葉です。それはとても嬉しいことです。ですが、私はクラスメイトと一緒に体育の授業を受けることができません。

私は、生まれつき病気があります。少し聞きなれない言葉だと思いますが、平滑筋というところにあるアクチン遺伝子の突然変異が原因となり、多くの器官で異変が起こる病気です。まだ日本では、数える程度しかいないようです。幸いにも見た目には全く分からないのですが、運動制限があり、走ったり、重いものを持ったりすることができません。

病気のことは物心ついた頃から両親に何度も説明をしてもらっていましたが、昔は運動も普通にできたので、それ程意識したことはありませんでした。最初に実感したのは、小学校3年生の時です。生まれてからずっと定期的に大阪の二つの大きな病院に通院しているのですが、当時の検査で大動脈が破裂寸前である事がわかりました。お医者さんには、「命の危険があるので、前例はありませんがすぐに手術をした方がいいです。」と言われました。私は、すごく怖くて泣いていたことを今でも覚えています。「失敗したら私はどうなるの？」という不安がずっと頭の中をよぎっていました。手術は無事成功しました。麻酔の影響で目が覚めたのは手術してから三日後ICU病棟の中でした。「手術、成功したんだ。よかった。」私はその時今自分が生きているということが本当に嬉しかったです。

ICUを一週間で出た私は小児病棟で何週間か入院し、自宅での療養生活を経てようやく登校することができました。久々に学校へ行った時、みんなと話したり、笑いあったりしていると、やっぱり普通の暮らしはいいなと感じました。

手術をしてからは血圧の上昇が特に危険であることが分かり、仕方ないと分かっているけど今まで一緒にしていた体育や体育祭の練習を窓越しに眺め、改めてみんなと同じでないということを辛いと感じないわけではありません。

でも、それらは小さな話。私が今こうやって元気であることは奇跡だと思っています。クラスメイトは、入院中に手紙を書いてくれました。学校に戻った後はプリントやノートを貸してくれたり、分からないところを丁寧に教えてくれたりもしました。今でも給食の時など重い荷物は一緒に持ってくれたりもします。本当に感謝しています。また十五年間私の病気に向き合って、ずっと育ててくれた両親に「ありがとう」を一番に伝えたいです。小さい頃から薬の管理をしてくれ、酸素チューブを常に付けていなければいけなかったのも、いつも酸素ボンベを背負って私を外に連れ出してくれました。不安な時やしんどい時に、ずっと傍にいて元気づけてくれました。

私は、今家族や周りの人たちに支えられつつむくことなく、前を向くことができます。しかし、現代社会では中高生の自殺者が多いことが問題になっています。厚生労働省の調査によると、去年の自殺者数は二万千四百四十人になるそうです。二〇一六年よりも減ったそうですが、専門家は、報告されていない人数を入れると、実際は十一万人を超えるのではないかと話していました。数字以上に私が驚いたのは、自殺原因の一位がいじめなどではなく、病気だったということです。病気の完治に見通しがつかなくなったり、不安や孤独になり、自ら命を絶ってしまうそうです。もし、私に今の家族や周りの人がいなかったら、同じように不安に押しつぶされていたかもしれません。

私は、これからも、ずっと病気に向き合っていかなければいけません。だけど私は立ち止まりはしません。立ち止まって病気だけを見つめてしまうと希望が見えなくなってしまいますからです。だから私は未来に向かって精一杯進んでいきたい。これからも未来の選択肢を広げるために。前へ前へ。